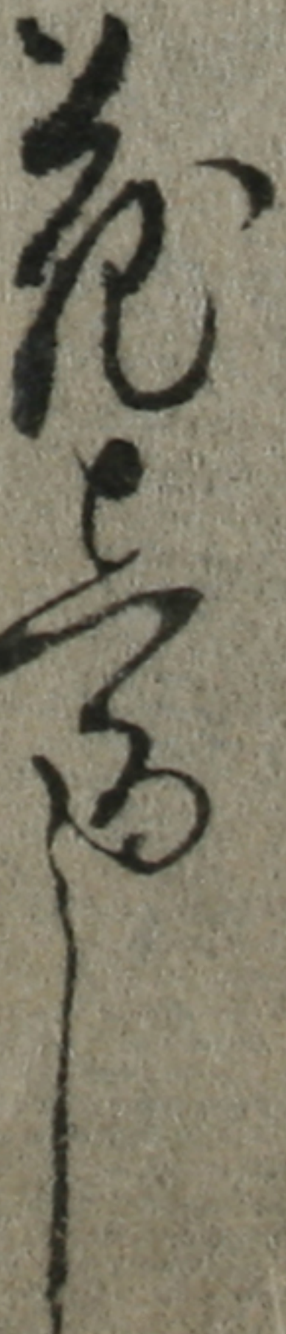
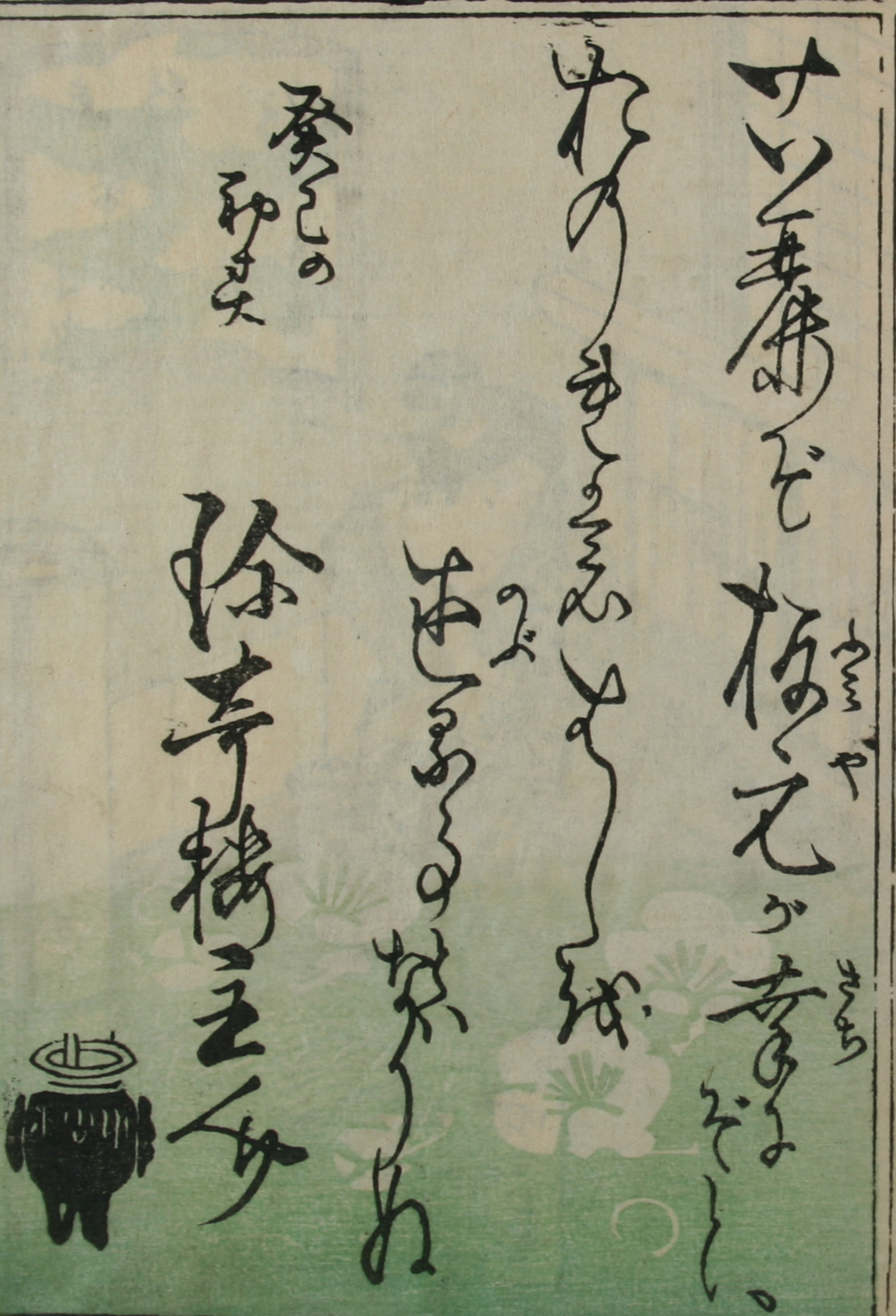
戀



毛利




唄女お雪

お春ん


夢の人
物語
枕の



福住傳兵衛

琴雅


蘭
右
松の花
一蔵
画

浮世風呂 新形 怠の花曽我之上

第四回

江戸 松亭金水編次

狂者東ふ。きやうじや

のもちやもぢ。

うろうろ。

わるめ

善悪もうろぎめろ

うろ〳〵猶そうづめ。

者東ふ。きやうじや 遂若もの 走る。東に 活所以の異と 淮南子の我

もぢ。 東に 所以の異と 淮南子の我

うろうろ。 わるめ 善悪もうろぎめろ うろ〳〵猶そうづめ。

狂

乾(かん)くなり。同(おなじ)く刀(かたな)のあるひとり。當下(とうか)に抜(ぬき)て。徒(いたづら)に傍(かたはら)を斫(きり)ぬれども。あとかたもなく消(きえ)うせぬ。

又(また)ある時(とき)。一人(ひとり)の女(をんな)。庭(にわ)の井(いど)を汲(くみ)ぬれば。水(みづ)の底(そこ)より。女(をんな)の首(かしら)出(いで)て。女(をんな)にものいひかけぬ。女(をんな)驚(おどろ)きて。家(いへ)に入(いり)ぬ。

又(また)ある人(ひと)。夜(よる)ふけて。門(かど)を叩(たたく)ものあり。出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。又(また)叩(たたく)。又(また)出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。かくする事(こと)三度(さんど)。其(その)人(ひと)怒(いかり)て。門(かど)を叩(たたく)ものを。いかにも強(つよく)叩(たたく)。又(また)出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。其(その)人(ひと)思(おもひ)ぬるやう。我(われ)を侮(あなどり)て。かくするならんと。内(うち)に入(いり)て。門(かど)を開(ひらき)ぬ。

又(また)ある人(ひと)。夜(よる)ふけて。門(かど)を叩(たたく)ものあり。出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。又(また)叩(たたく)。又(また)出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。かくする事(こと)三度(さんど)。其(その)人(ひと)怒(いかり)て。門(かど)を叩(たたく)ものを。いかにも強(つよく)叩(たたく)。又(また)出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。其(その)人(ひと)思(おもひ)ぬるやう。我(われ)を侮(あなどり)て。かくするならんと。内(うち)に入(いり)て。門(かど)を開(ひらき)ぬ。

又(また)ある人(ひと)。夜(よる)ふけて。門(かど)を叩(たたく)ものあり。出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。又(また)叩(たたく)。又(また)出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。かくする事(こと)三度(さんど)。其(その)人(ひと)怒(いかり)て。門(かど)を叩(たたく)ものを。いかにも強(つよく)叩(たたく)。又(また)出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。其(その)人(ひと)思(おもひ)ぬるやう。我(われ)を侮(あなどり)て。かくするならんと。内(うち)に入(いり)て。門(かど)を開(ひらき)ぬ。

又(また)ある人(ひと)。夜(よる)ふけて。門(かど)を叩(たたく)ものあり。出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。又(また)叩(たたく)。又(また)出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。かくする事(こと)三度(さんど)。其(その)人(ひと)怒(いかり)て。門(かど)を叩(たたく)ものを。いかにも強(つよく)叩(たたく)。又(また)出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。其(その)人(ひと)思(おもひ)ぬるやう。我(われ)を侮(あなどり)て。かくするならんと。内(うち)に入(いり)て。門(かど)を開(ひらき)ぬ。

又(また)ある人(ひと)。夜(よる)ふけて。門(かど)を叩(たたく)ものあり。出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。又(また)叩(たたく)。又(また)出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。かくする事(こと)三度(さんど)。其(その)人(ひと)怒(いかり)て。門(かど)を叩(たたく)ものを。いかにも強(つよく)叩(たたく)。又(また)出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。其(その)人(ひと)思(おもひ)ぬるやう。我(われ)を侮(あなどり)て。かくするならんと。内(うち)に入(いり)て。門(かど)を開(ひらき)ぬ。

又(また)ある人(ひと)。夜(よる)ふけて。門(かど)を叩(たたく)ものあり。出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。又(また)叩(たたく)。又(また)出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。かくする事(こと)三度(さんど)。其(その)人(ひと)怒(いかり)て。門(かど)を叩(たたく)ものを。いかにも強(つよく)叩(たたく)。又(また)出(いで)て見(みる)に。人(ひと)なし。其(その)人(ひと)思(おもひ)ぬるやう。我(われ)を侮(あなどり)て。かくするならんと。内(うち)に入(いり)て。門(かど)を開(ひらき)ぬ。

りあまくちろ。今あんへ。伴ぢ
とつのがお
まつも
流よ和拗。なのゆもかな
うう
方へつえもせません。そぎ
女房のこ。かあぐくろ
うぜつく。犯す支婦の間が
をかもとれ多。母
小姓へ

いふのだ。其処（そこ）が解（わか）らなくちゃ一（いち）向（かう）話（はなし）にならない。

吾輩（わがはい）が苦沙弥（くしゃみ）先生（せんせい）の所（ところ）へ来（き）て飯（めし）を食（く）ふ様（やう）になつてから、もう大分（だいぶ）月日（つきひ）が経（た）つ。此（この）間（あひだ）中（うち）から気（き）候（こう）の変（へん）化（くわ）甚（はなは）だしく、日（ひ）毎（ごと）に暖（あたゝ）かくなつて来（く）る。元（もと）来（き）吾輩（わがはい）は猫（ねこ）だから冬（ふゆ）が来（き）ようが、霜（しも）が降（ふ）りようが、あまり苦（く）にならない。暑（あつ）くなつて来（く）ると、風（かぜ）を入（い）れる為（ため）に、窓（まど）を開（あ）けるから、それが大（だい）変（へん）結（けつ）構（こう）だ。

吾輩（わがはい）の主人（しゅじん）は滅（めつ）多（た）に吾輩（わがはい）の事（こと）を褒（ほ）めた事（こと）がない。時（とき）には足（あし）蹴（げ）にする位（くらい）だから、猫（ねこ）の好（すき）いものは決（けつ）して食（く）はせまいと思（おも）ふ。ところが吾輩（わがはい）は人（ひと）間（あひだ）の食（く）ふものなら何（なん）でも食（く）ふ。食（く）はせるものなら何（なん）でも食（く）ふ。食（く）はせるものなら何（なん）でも食（く）ふ。食（く）はせる

わかうたう。お爺さんうたう。
ちゑとこぼれる。序にぢいさんも一寸ふ
そふ。くらゐの支とのよぢ。余まり
まりおまへ男がよんうまり里立竟八年
ものの廿八ヶ年ト云ぢ。吾儕ぢやうやく
ぎれをうちおまへ云
ぢ。なんでも中ぢえふまつがよん。
爺さんの遺ぢ
とへらそまれぞ。

とうど
へもの
の
伸びるひく。女子ぎ
うちかけを。や
すんでん
すこ。夫ふ
ざ
ト一重ひとへ
の
ひとへ
ものそぶふ
ものうち
ぎ
ぬ
ぬ
ぬ

さるほどに、ひかりて雷門あたりの
みぎわうつるばかりの花さかりの
つゆのごとくの酒宴とりどりの苦労をいくつ
しゅ
自慢藤助言。卿言。とて六兵衛
ふぢ
が。ーーとまうしうの助
言
かた
頼被申大人
と
ーーうまとゆるべ
そろ
ふみ和歌あまたとりちらし
ちょ
せそ。

なるべし。

されば此家の養子となりて家を嗣ぐ人と雖も、其の母妻と雖も、此家の名を汚すものは、即ち不孝人なり。

又此家の財産



蛇ふみや
笑ハかそふ
きつゞの声



岩木山あれば待ちもうけんのみ

傍へ

傍へよりそひ

狗狂おきふして苦痛の体

さとり

抱すれども

痛む中

痛みの体

よもと

瘡もあり

さるぐつわ

かく主ぎ
でもふ。実(まこと)
晴(はれ)やかなる
さうりょうを
そもそも非(あら)ざるものまでも
師よ
と称(とな)へ
を称(とな)へ
(ちぎ)
(えぐ)
(はな)
(あら)
(しゅ)
(と)
(そも)
(しゅ)
(まこと)
(はれ)
(しょう)

しとそもそも多小計
ありしまことに
うまひとびかるもへこるに二人
言ひも
ど
の
まそよるのとあひめよねりあがぐり
ちぎ
まことの
ことを人もれぞうし
きろ
ふよ
つく
ものど
まえ
ぬ
きこ
ぬ
ちぐ
ぬ
ぬ
ぬ

うとき翌朝起るる人の方ふ
翌朝をとゞのめて送るべく
とゝのひて越るを見べきぎ
狗(洗)ふ事もうるさくとゞめ
おろ(洗)ふ事もうるさくとゞめ
ぶ外ふ計ふ
ぶ外ふ計ふ
ぶ外ふ計ふ

ふとうちもの
中うちのつぶ女子と小人
と出(ちぐさ)のがてと書物
ふわう。ちゝと耳(わぶ)
ことを成(なる)
うべ(うう)
つけ揚(あが)るが如(ごと)
色。(いろ)
あり(あり)
ありうる蒲(かば)
(ふとう)
(ちう)
の下(した)
草(くさ)
(ちう)
(ちう)
(ちう

さぐり探すなどして。ふとそこにあるものに手がふれ。どうもそれが人間の足のやうに思はれ。はてな。と思ひながらなほもさぐつてゐるうちに。どうやら人間の足にちがひない。と思ふと。ぞつとして。思はず手をひつこめた。しかしまた勇気をふるひおこして。おそるおそるさぐつてゐるうちに。どうやらそれが人間の足にちがひないと

の為びいり。まど
ぎわへ。
ろうそく
菌花をとびえぐかり
のぞ
物ぐり
そのそこ
ー。ろく
ー。それぐるろう
ぜひ
ー。今ろまもろ
ー。
ー。
ー。

すゞめ
雀いろ〳〵
もて
かへる。母の
まと
ぎうぐおや
と都方へ
そもじ
れ
ど誰も
ふ
ず。女ども
ぞ
ら
ぶ
ら
ぶ
ら
ぶ

生人今
の漏さず。如
長
本
日
谷の觀音
坂東第四
の札所
昊
新の
仏
胖
中
小
鳥
集
人
目
多
が
ア
ま
ど
ら
ん
う
と
。
高
く
と
歩
と
ゆ
く
ふ
と
ろ
ひ
ゆ
く
ふ
と
ろ
ひ
ゆ
く
ふ
と
ろ
ひ

の傍より。
さる人おそく群より
さる人。遅れまじと着
へ。かの人のうふ
ふ猿を
おがみ。うし
ろの方より
形ミ
味せん
いづまで

ぐんあい
観音の
けいだい
境内よ

ちご
子ごろ
さる
猿を

ほおばって
あめ
飴を
ほうばる
頬張る

いわ
岩ま花









さのぼり多
ひがし
東へおよそ
ろう
六里ばかり
ど
渡ござ
きた
北いろ
ろ
多
ろこ
まで
ジャジャジャジャ
里あまり
ろう
ろう
ろう

まちく蝋燭のそと蚊ぶ
コチやうまやくくうまやくくよ
めめをんまもまもる
きこゑようぐ唄よくもる
しらそ。注もあれば
きる
猿あの貝
ど二言三言。
まべ詩う
猿こと。
猿こと。
猿こと。

さんぼうの怪と思ひ。
けるもの。
よべ。右のごとく
うろたへ
日
ふよく
ん
まちがひ。いよ〳〵不審
女子の
白き
ぶて
方
もる
ゆき
ぬぐ
ひ
ぬぎ
ぬ
ぬ
ぬ

てぶらで小猿とび。ふるげんきもの也女をおそれ。ふみ。ぬすみ。ぶんどりて猿まへしりへ。ぴょんぴょんとびまわり。跡よりおひかけてふ。ふまよう。猿とびがかくごをきわめてふ。ふまよう。猿とびがかくごをきわめてふ。ふまよう。猿とびがかくごをきわめ

老を防げどもそれも妻子ありて。物うるさ
がり。なべて人にまじはらず。綾羅錦繍を着
ても。身の楽しみとせず。ただ一人居て。
物思ひにふけり。夜は寝もやらず。昼は
ぼんやりとして。何事をか思ひ出すらん。
もとより。男女の道にうとく。ことに
女房などは。持つことをも。いとふ
ものから。ある時。ふと。
思ひ出したる
ことありて。
女房を
持ち
ける。
その
女房
の。
ちや
塞ぐ
つまり

きん金ぐらいなら。なくなっても。
たいしたことはない。
のこり殘りの。
ばあい場合には。
いろいろ色々。
ことば言葉。
かえって却って。
ふえる殖える。
ばあい場合。
ひと人。
あつまる集まる人。
ひと人。
ばあい場合。
ちょっと。
ちょっと。
ひと人。
ばあい場合。
ひと人。
ばあい場合。
ひと人。
ばあい場合

とりもちて
事のよしを初めより
因ふかく物語(ものがたり)ければ
金(きん)そろへて喘(あえ)ぎ
ゆくゆく思ひ惑ひ
ぬるうち。
今催(もよほ)すの
一つの
ありさま
解(と)く